

駿建 2012 Oct. Vol.40 No.3

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

SHUNKEN

Quarterly Journal of

*Department of Architecture. College of Science and Technology, Nihon University
& Department of Architecture and Living Design. Nihon University Junior College*



[SPECIAL FEATURE]

1/1 実寸の楽しい世界！

海の家プロジェクト、デザインワークショップ、「生きるための家」展 他

Special Feature

1/1

実寸の楽しい世界！



僕らが生きているのは、1/1(イチブンノイチ)の世界です。日々大学で、建築にまつわるさまざまなことを学んでいるのも、一生懸命、図面や模型をつくっているのも、いつの日か1/1の世界でモノゴトをクリエイト（創造）していくためのトレーニングたと言っても過言ではありません。それでは、1/1を実際に自分たちの手でつくることには、どんな楽しみや苦悩があるのでしょうか。今回の特集は、「1/1 実寸の楽しい世界！」と題し、学内の学生たちが学内外で、この夏に関わった1/1にまつわるプロジェクトや授業、関連イベントを紹介します！

1

海の家プロジェクト 建てることの難しさと楽しさを体験した2012年の夏

Text = Motoko Tanaka (mosaki)

Photo=P2,3 Masaki Onishi(mosaki), P4-7 Archimans

Support=Yuki Iina



7 month war

ひとつの仮設建築をめぐる僕らの7ヶ月間

学部生3、4年生で構成されるチーム「(仮)アーキマンス」が、海の家のコンペティションで最優秀賞に選ばれたことは、前号7月号にて取り上げました。限られた施工費で完成させなくてはならなかったため、その後、彼らは学内外から何十人もの助けを受けながら、多くの人々と共に実施設計とセルフビルドによる施工を敢行させ、そしてついにオープニング!

短い夏の期間、葉山の海を彩った白い海の家「カフェドロペラメール」は、多くの人々に利用されました。取材に訪れた日は、夕暮れの海の向こうに富士山が見える中、あるカップルの結婚パーティーが……。そして夏は過ぎ、海の家は壊される日を迎えることとなります。ここではこの海の家に関わった学生たちの一夏のドキュメントをお届けしましょう。



0 month

2/1 pm12:00
代官山にてメンバーがはじめて顔を合わせて打合せを。一次審査通過を目指す



2/24 pm11:00
一次審査通過との連絡を受け、二次審査へ向けて案を詰めていく。前日のギリギリまで模型作業を



2/25 am2:00
午前2時、模型が完成。その後、プレゼンを経て、最優秀賞に選ばれた。ここからは未知なる領域



2nd month

4/16 am10:00
できるだけ、以前の海の家で使われていた材料を使ってほしいと要望があった。材料を確認しにメンバーは葉山へ向かった



4/16 pm2:00
いろんなモノが出てきた。実際の設計にも力が入るきっかけに



4th month

6/4 am9:00
6月の葉山一式海岸。整地工事ははじまる



6/5 am9:00
一日で整地は終了。この日はじめて大工さんたちと顔合わせを。その後、墨出し作業を行った。大工さんとの共同作業が今日からはじまる



6/6 am12:00
現場近くへお昼ご飯の買い出し。学生ができる作業を増やすために材料も買いに行く



6/7 pm5:00
数人の大工さんたちにより、2日間で墨出し作業は終了



6/7 pm3:00
大工さんの横で、みんなで浸透マスの穴を掘り出した。重機があればすぐ済むのだけれどスコップで



6/10 am11:00
穴がある程度掘ったら、マスの組み立てをはじめ。余っている材料で強度もあるものをつくるために試行錯誤



6/11 am12:00
2カ所あるマスが完成。このあとこのマスはしっかり機能することになる。がんばってつくってよかった



6/12 pm5:00
現場に入って9日目。大工さんたちの作業スピードが早く、気がついたら床基礎工事が終わっていた。やっとしっかり建物のスケールが見えてきた



6/14 pm5:00
手伝いをしながらデッキ工事完了。形も見えてきて、気持ちのよい空間をつくりたい思いが強くなってきた



6/15 pm3:00
柱や梁が現れてきた。このころから搬入や今後の作業とのラップを考えながら工程が組まれていく



6/15 pm4:00
大工さんに教わりながら、柱を立てる手伝いや、土留めの作業を学生たちで進めていく



6/16 am11:00
工具にも慣れてきて、みんなで躯体をつくる



6/16 pm2:00
どんどん躯体が建ち上がっていく



6/17 pm3:00
躯体完成後に部分的に屋根がかかってくる



6/18 am11:00
雨が降る中でも作業は続行。自分たちができる作業を探しながら進めていく



6/19 am12:00
現場のことをいくら調べても僕たちは知らないことばかり。現場ではいつも変更が出て、その度に大工さんへ伝える



6/19 pm5:00
コンベックスをあてながらディテールを検討。パーカウンターの高さや幅などを考える



6/20 am10:00
台風グチャル上陸



6/20 am11:00
みんな落ち込んでいても何も変わらないので、掃除からはじめる



6/21 am12:00
周辺の片付けをしている間に大工さんは躯体の修正。黙々と作業をする姿に僕らの土気もあがる



6/22 pm5:00
暑い時期になり熱中症などにも気をつけながら、台風にも負けずに作業を進める



6/25 pm3:00
大工さんたちのおかげで台風の被害も3日で工程表通りに戻った



6/26 am11:00
壁を取りつけはじめ、学生も参加しながら作業していく



6/27 pm2:00
柱、壁、屋根はだいたい工事が終わり、残るは家具と細部だけ



6/28 pm5:00
DJブースや造作家具も学生が手伝いながら製作。大工さんの作業はほぼ終了



6/29 pm3:00
電気屋さんや水道屋さんが来る中、学生は塗装作業を進める



6/30 am11:00
マスキングをしてから全体を白くしていく。自分たちも白くなりながらがんばる



7/1 am12:00
デッキ材にはオイルステインを塗っていく。床、柱、家具など塗る場所が多くて大変



7/6 pm5:00
塗装は二度塗り。明日がオープン。掃除が終わっていない作業を徹夜で



7/7 pm3:00
そしてついにオープン!! 実際の利用者に感想を聞けるなんて、これまたはじめての経験



6th month
8/18 am11:00
土日に遊びに行く、ととてもにぎわっていて感動。イメージ通りだったり、うまくいかないところがわかったり。次へ活かすぞ



7th month
9/3 am12:00
あっといふ間。約一カ月の海の家の営業が終了。資材倉庫テントをつくり解体作業へ



9/12 pm5:00
浜に何もなくなった。みんなたたくたになりながらも、感じたことのない達成感に包まれる。みんなありがとう

コンペティション参加時は4名だった「(仮)アーキマーズ」は、実施設計の段階へ入ると、構造系研究室の学生をはじめ主要メンバーを増やすことになりました。さらに現場へ入ると、メンバーの友人知人がセルフビルドを手伝うために集まりました。ここでは、このプロジェクトに関わったみんなの声を届けます！



四元仁美
(建築学科4年)

今回のプロジェクトは、たくさんの方々に助けていただいたお陰で無事終了することができました。施主の方々は、プランに対して思うことをはっきりと伝えてください、デザインに関しては一任してくださいました。学生の方々は、朝早くから現場に来て、材料運びや穴掘りなど、形の見えない作業が多い中でも笑顔で施工してくださいました。施工会社の皆様には、たくさんのことを教えていただきました。設計で解決しなかったことが現場ですぐ解決したり、日々リアルタイムで問題を共有したりして、現場の大切さを知りました。彼らに出会っていなければ今回のプロジェクトは成功していませんでした。関わってくださった全ての方に感謝します。



落合俊行
(建築学科4年 / 佐藤光彦研)

修士設計の手伝いが終わって間もない頃に最優秀賞をいただきました。しかし、建築学生としての大好きな建築への興味が役に立ったのはここまででした。実施設計や施工では普段の設計課題では考えもしないことがたくさん起きました。でもわからないことを一つひとつクリアしていくのは楽しかったです。今後わからないことだらけだろうけど、学生の間には流行りに興味を持つだけでなくつまらないことにもぶつかりまくった方がいい。設計から施工、解体を体験する中で、そう強く思いました。ボランティアに来てくれた人たちも、きっと同じ思いを持っていると思います。関わっていただいた全ての方に感謝します。



高野和哉
(建築学科4年 / 佐藤慎也研)

このプロジェクトのはじまりは2月をはじめ、7ヶ月も前のことだ。そんな経過しているのかもと思うし、それしか経っていないのかもと思う。それだけ濃密な時間だったのでしょう。正直はじめは、実際に建築として施工するということに対して全く想像が及んでいませんでした。一連の作業も、それに伴う責任も、やりながらなんとかこなし、なんとか身についていきました。終わってみれば、あのときああできていればと思うことばかりです。そんな未熟な4人がこのプロジェクトを貫徹できたのは、一重に関わってくれた方達のおかげです。特に、何のお返しもできないのに手伝ってくれた学生のみなさん、本当にありがとう。おかげでよい建築ができました。



飯名悠生
(建築学科3年)

自分たちで設計したものが実際にモノとして利用される。建築学生をやっているだけではできない体験をすることができました。それもメンバーの力や手伝ってくれた人がいたからこそ。みなさんにも感謝しています。体験としては、たかが仮設の建築物と言われるかもしれませんが、7ヶ月という期間で設計から施工、解体までを行うことで様々なことを経験できました。また、得られたものは経験だけでなく、多くの人と知り合うことができたことも大きかったです。今後も、別のプロジェクトが進んでいく予定です。そのときはまた、多くの人と関わりたい。ご協力お願いします。

プロではない「プロ予備軍」の人達と組むのは海プロジェクトをしてはじめてでした。ある程度の覚悟をしていたつもりではいたものの、ここまで大変だったのか、というのが正直な感想です。そもそも自分たちですら余裕なないのに、何をお願いしてしまったんだろう、と思うこともありましたが結果よければ全てよし。多少の問題はあれど仕上がりはキレイでデザインもよかったですし、大変な作業も最後までやり通したのは何よりも素晴らしいことです。いろいろありましたが一緒に頑張ってお互いに成長できた夏だったと思います。ありがとうございます。

小山匡志(カフェドローバメール運営責任者)

とても面白かったです。今まで慣れ親しんできた図面やパースという情報から実際にどのように建てるのか、設計班は事あるごとに図面を書き直してディテールを修正し、一方で図面を引いているだけでは気づかない細かい作業に多くの時間を取られました。それでも日に日に実物ができ上がっていくにつれて感じるワクワクする気持ちは何事にも代えがたい思い出です。(仮)アーキマーズのような学生主体のグループが参加できるプロジェクトがもっとあればいいのですが……。自分がどのように建築と関わり学んでいくのか、主体的にデザインしていく大切さを教えてもらいました。ありがとうございます！

高嶋俊伸(建築学科4年 / 宇崎崎研)

私をはじめ一色海岸の現場に行ったときは砂浜に東が刺さっているだけで、海の家ができるなんて想像できませんでした。しかし現場へ通う度に、図面が実際に建ち上がっていく光景には、本当に感動しました。オープン後、夕方から夜にかけてお店で過ごしたことがあったのですが、そのときの夕焼けや空気の音、お店の雰囲気全部が素敵でした。こんなにすいことに少しでも関わらせて幸せです。建築物で一番有名になるのは設計者の名前かもしれませんが、でも建築物は絶対に1人でつくることができないんだなぁと、当たり前ですが感じました。

内山かおり(建築学科4年 / 八藤後研)

学生最後の夏に貴重な経験をさせていただきました。本当にいろんな方と知り合うことができ、自分の成長へと繋がる時間となりました。また、今回はサインのデザインもさせていただきました。自分のグラフィックデザインをまたひとつ実現化できたのも(仮)アーキマーズのお陰です。4年生のときから年に1度は実施を経験するという目標のもと、「かまぼこカーテン」や「港村アーキエイドブース」、「リアルサイズコンペ」、そして今回の海の家と経験してきました。さまざまなつくり方に触れることで、実施コンペにおける考え、設計や進路に変化をもたらせたと思います。

渋谷舞(建築学専攻 M2 / 佐藤光彦研)

このプロジェクトではさまざまなはじめてが経験できました。“建築を建てる”ということをも身をもって実感できたと思います。建築に携わって仕事にしている方からすれば笑われるようなことかもしれないけど、その一つひとつは自分たちには新鮮でした。これまで違う建築を学んでいるのだから感じました。リアルな現場での頭の動かし方を少しでも盗めたら、そう思いながらお手伝いをしていました。このような機会に恵まれて本当に幸せです。学生でも早いうちにこのような経験をすべきだと思いました。最後に本当にありがとうございます！(仮)アーキマーズ！

武田和真(建築学科4年 / 橋本研)

製図室で構造検討用の模型をつくり、「本当に建つのか(笑)」と言っているうちに施工がはじまり、どんどん変わっていく建築と大工さんの仕事ぶりに圧倒されました。自分は床下に溜って排水周りを施工したり、ひたすら土を運んだり、予想以上の壁の量に苦戦しながらペンキを塗ったり、作業は楽ではなかったけど、変化していく建築に介在できることに大きな充実感を得ました。また、建築はたくさんの方の力とお金のバランスの上に成り立つのだと実感しました。学校や子育てと両立しながら動きまわる4人がよかった。本当にお疲れ様でした。

櫻井駿士(建築学科4年 / 山中研)

大学では、「1/1 スケール」の仕事をするために専門知識を吸収しながら、仲間たちと切磋琢磨し、その下積みを重ねるもの。これを全て学生のうちにやってしまう(仮)アーキマーズ。私は、コンペ入賞後に(仮)アーキマーズに入社(?)し、主に施工の手伝いをしました。この時期の強敵の1つ、達成評価テスト。一発でクリアしないと後々めんどうなので1回で取ることをお勧めします。なぜなら、大学で経験することが難しいイベントに参加できるチャンスとその機会に関わるすい仲間達と出会うチャンスを逃がさないで流してしまうから。(仮)アーキマーズに所属できたことでリアルな経験をすることができました。(笑)

原野寛幸(建築学科4年 / 井上研)

海の家を建てることは、はじめての経験だったので、どのようにつくられるのに興味がありました。実際は力仕事なので些細なことしかお手伝いできませんでしたが、完成したあとの喜び、そして多くの方の支えが必要なんだと気付かされました。私もいつか自分の設計した建物をつくってもらえるように、日々勉強に励んでいきたいと思えます。海の家のお手伝いに参加させていただくことができ、とても嬉しく思いました。ありがとうございます。

奥山彩(日本工学院専門学校)

今回の海の家プロジェクトに参加させていただき、ありがとうございます。たくさん学ぶことができました。そして、いつか私も自分の建築を建ててみたいと思いました。

上野萌子(日本工学院専門学校)

普段、機会のない施工現場に携わることができてとても勉強になりました。海の家が建ち上がっていく姿は何とも言えないワクワク感を感じました。完成してよかったです!!よい経験させてもらいありがとうございます。海の家プロジェクトおつかれさまでした。

渡辺裕貴(建築学科4年 / 今村研)

今回の海の家は、コンペ当初からプランを見せてもらっていました。実際に施工していく上で、図面と現場の幅員を合わせていくことの難しさを実感できました。なかなか経験できることではないので、(仮)アーキマーズには感謝しています。本当におつかれさまでした。

山下晋考(日本工学院専門学校)

今回の体験で、日本大学の方々をはじめ多くの方々と出会い、一緒に暑い中作業したのはとてもいい思い出になりました。僕は数回しか参加できませんでしたが、行くとたびにどんどん完成に近づいていくことにもワクワクしました。台風で半壊しましたが、みんなでめげずに作業をして、最後に完成したときはとても嬉しかったです。本当にいい体験、いい思い出ができました。

足利俊太(日本工学院専門学校)

その他サポーター一覧(順不同)

| 建築学科4年

清水碩斗、田嶋敦志、大澤美幸、富樫由美、中村透、山本沙織、備前翔太、木村龍也、田中雄一、滝崎温子、武田和真、岩崎晃太郎

| 建築学科3年

緒方彩乃、古谷隆康、今山大地、山田久美子、松森みな美、清野いずみ、山川洋介

| 日本工学院専門学校

下平隆、武林諒、久保典之、高取建太、吉田達也、山下晋孝、大森直彦、中森友博

| その他

加藤優一(新成電機)、沖村舞子(mokoデザイン事務所)、田中直(中央大学)、松澤一歩(千葉大学)、高田祐介(東京工業大学)、村田雅俊(フリーター)、さやかちゃん、鈴木洋平

今回のプロジェクトをきっかけに、「(仮)アーキマーズ」には、いくつかの実施設計の依頼も来ているそう。学びながら社会的な責任を負った仕事をするには、もちろん大きな苦しみも伴いますが、その分の収穫がきっとあるはず。過去を振り返ると、いつの時代も、大学を卒業してすぐに設計事務所を立ち上げる人たちがいたもの。例えば、建築家の小嶋一浩さん(横浜国立大学大学院 Y-GSA 教授)や小泉雅生さん(首都大学東京教授)たちが、東京大学の原研究室で共に学んでいた仲間たち7人と在学中に設計事務所シーラカンズを立ち上げたり、現在非常勤講師として教えている古澤大輔さんたちによるメジロスタジオも、卒業後すぐに設立したのでした。さて、これから「(仮)アーキマーズ」はどうなる?!



Special Feature

1/1

実寸の
楽しい
世界！

2

デザインワークショップ

21世紀の千利休を目指し、学内につくり上げた4つの茶室！

Text = 西脇梓 (設計講師室助手)

2012年度 デザインワークショップII | 共通テーマ：茶室
担当教員：重枝豊、河内一泰、福山博之、古澤大輔

本年も夏季集中「デザインワークショップII」を、8月6日から11日まで実施した。参加者は、3年生17名、4年生5名、合計22名。これまでは主に家具の製作をテーマに行ってきたが、今年は科目担当の重枝豊先生のもと、そのテーマを一新。共通テーマを「茶室」とした。

ユニットマスターに非常勤講師の河内一泰、福山博之、古澤大輔の各先生を迎え、重枝先生を含めた4名の下で「21世紀の「千利休」をめざし、1つのミニマム空間の提案により、現代の空間に息吹を吹き込むことは可能か？、不可能か？」というテーマに学生たちは取り組んだ。

条件としては、4～5日程度、5万円以内でその意図を実現することが可能な空間であることと、規模は3畳までのミニマムな空間とすることが設定され、最終的には実物でプレゼンテーションすることが求められた。設営場所は、駿河台校舎(5号館製図室・5号館横広場など)とし、プレゼンテーション時に内部に入ることを前提とした。また、利休が室内に「炉」を切ることによって新しい機能を座敷に持ち込んだように、何らかの機能に対する提案が望ましいとされたが、それには必ずしもこだわらなくてもよいこととなった。

初日に、各々「茶室」について案を提出し第一次審査が行われた。その案を元にユニット編成し、先生1名と学生5～6名が1ユニットとなって、最終案を策定し、原寸大で製作した。3年生にとっては、はじめてのグループ課題であり、最終審査・講評会まで6日間という限られた時間の中で、構想を実物にすることは、コミュニケーション能力や体力も必要となった。それに関わらず、成果物はバラエティ豊かなものとなり、満足感溢れる学生の顔が印象的だった。



参加学生により「茶室」案のプレゼン、講評からワークショップ開始



4つのユニットに分かれて連日の作業



どうプレゼンするか、ユニットで試行錯誤



プレゼン当日。各ユニットがプレゼン、そして先生たちは体験



特別ゲストとして、写真家の平井広行さんも審査会場に。構造家の佐藤淳さんや学内の先生方も会場へかけつけました



最後に、最優秀賞と平井宏行賞を発表！その後は、つくられた茶室そのものを使って打ち上げが行われました



1 | Shigeeda Unit

担当教員：重枝豊

メンバー：3年生/飯名悠生、小笠舞穂、緒方彩乃、福島里佳、松森みな美

平井広行賞!



担当教員からのメッセージ

われわれの班では立案の段階から「空間」の創造に際して、「空間のイメージ」が先行し、最後までイメージの構築に参加者の議論が集中しました。大学の設計課題では、一部を除いて個人プレーが主体となりがちで、議論しながら「モノ」をつくり上げていくことが少ない。そのために、より具体的なイメージを持っている学生が、積み上げ式に構築しようとする学生を凌駕する結果となったといってもいいかもしれません。もちろん、その過程でそれぞれの学生の指摘によって、具体的なイメージが変容していった過程は、興味深かったです。

もう一つ、実物大の作品をつくるという制限が、空間の持つさまざまな質感を具体的に提示することを難しくさせたようです。モノを実際につくるという実感を味わえたこと、チームでまとめてゆくことの難しさが体験できたことが今後の建築活動のプラスになってくれることを切望しています。

監



2 | Kochi Unit

担当教員：河内一泰

メンバー：3年生/池田汐里、江崎桃子、平岡奈々、山川洋介、蓮沢紳之介、藤田康平



担当教員からのメッセージ

利休は 4.5 畳の茶室を 2 畳に縮小しました。狭すぎる部屋は、お互いの動きの一つひとつが空間に影響を与え、濃密な場をつくります。利休が空間を小さくすることで進化させた茶室を、今回は定員を増やすことでさらに推し進めるべく、ユニットのメンバー全員、最大 6 人入れる茶室をつくることにしました。

伸縮するメッシュの布でできた半透明の筒は、2 人以上が入ってはじめて空間が現れ、互いにバランスすることで構造的に成立します。完成した作品は体験としての説得力が少し至りませんでした。狭さの豊かさとは何か、空間とは何か、を考えさせられたワークショップでした。机の上でのミーティング、模型、1/1 スケールでの実験など、頭と体と両方のレベルでのエスキスを重ね、案を展開できたことはよかったです。

監



3|Fukuyama Unit

担当教員：福山博之
メンバー：3年生/行徳美紗子、藤池広明、松本泰佑、4年生/加藤俊彦、富樫由美

最優秀賞!



担当教員からのメッセージ

カメラオプスキュラ（暗い部屋）を茶室とする提案です。1畳、天井高90cmの暗く閉じた箱に、ワインのコルクで栓がされた無数の穴があり、栓を抜くと内部に外の光景の一部が転倒した像を結びます。箱はキャスターで支えられており、移動により像も変化します。

そのときどきに好きな場所で外部そのものとは少し違った像を内部に定着させる仕掛けは、茶室の生け花、掛け軸などが季節と連動することで部屋のありさまを変化させることと通じるというコンセプトに基づいており、これが富樫さんがカメラオプスキュラを提案した理由となっています。

また、箱は1mほどの高さを利用したバーでもあり、ワークショップという一種のお祭りに一役かう演出で、ピンホールの栓がワインのコルクであるということがオチになっています。やはり実際にモノをつくるのは楽しい。またやりたいです。

駿

4|Furusawa Unit

担当教員：古澤大輔
メンバー：3年生/河野将多、小島弘旭、福澤大吉、4年生/工藤大将、沼田泰成、柳田貴裕



担当教員からのメッセージ

私の班では、都市をどのように解釈できるかという視点のもとエスキスを重ねました。極小空間を出発点として、いかに都市的スケールにリーチできるかという問題設定です。その結果導き出された提案は、木密地帯の解体工事現場と隣家とのスキマに、廃材を用いた茶室を一時的に建設するというものでした。隣地境界線や木造軸組といった線部材を顕在化させることにより、日本の都市が俣い線の集合体で構成されているという現実が提示されています。つまりマッシブなヴォリュームで成り立っている西洋の都市像に対するオルタナティブであるということです。

実際には5号館EVホール裏に、彼らの手によって原寸大のスケールで再現されました。正直なところモノとしての完成度は決して高いとは言えず改善の余地が見られます。しかし、状況をポジティブに捉え都市を積極的にノーテーションしていこうとする彼らの姿勢を高く評価したいです。

駿

EVENT

次は、みんなも参加してみよう！

銀座に茶室を建てられる建築学会主催のコンペティション



8月9日に、2012年銀茶会学生コンペの審査が行われた。会場わきには提出されたすべての案の模型とパネルが展示された



左：2009年茶室学生コンペの際、会場の建築会館中庭に建てられた茶室

中、右：2011年銀茶会学生コンペで選出された優秀作品は、実際に銀茶会の会場、銀座に建てられ、イベントの一環として使用された

毎年秋に開催される日本建築学会の建築週間学生ワークショップでは、2009年から銀茶会での茶室づくりに参加している。銀茶会とは2003年から開催されている野点大茶会。銀座に4流派(表千家、裏千家、江戸千家、武者小路千家)のお茶席のほか、点茶の体験コーナーがあり、外来者が気軽にお茶を体験できるイベントだ。10以上の茶室が建ち並ぶ中、建築学生的设计・製作による創作茶室が企画・展示され、会期中実際に利用される。

今年是一次審査に40点の応募があり、全作品が建築会館・建築博物館ギャラリーにて一週間展示、8月9日に公開審査が行われた。その結果4作品が二次審査へ通過、他作品にも審査員賞、学生賞などが授与された。一次審査を通過した作品を制作した4チームは本阿彌守光(武者小路千家)によるレクチャー、審査員ら(中谷正人、藤村龍至、田中元子、佐藤淳)によるエスキースを経て原寸大模型を制作、10月7日の建築文化週間学生ワークショップ最終日の公開審査に進む。さらに銀茶会当日を三次審査とし、建築文化週間学生グランプリ金賞、銀賞それぞれ1点が選ばれる予定だ。

今年の銀茶会は10月25日から29日の4日間、会場は東京銀座三越新館9階テラスで開催される。建築週間学生ワークショップによるコンペ及び銀茶会への参加は今後も継続される予定なので、読者諸君にはぜひチャレンジしてほしい。

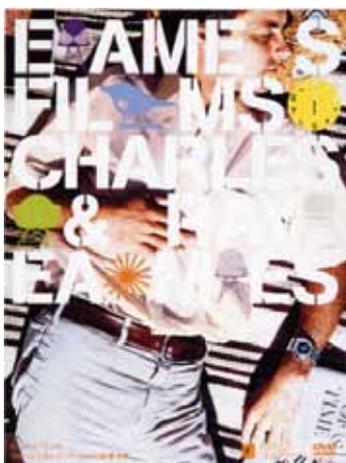
設

DVD

細胞から宇宙まで、スケールを旅する映像作品！

スケールって、意識するととても面白い世界ですね。それぞれのスケールには、そのスケールだからこそ見える世界があるものです。そんな面白さを凝縮したのが「パワーズ・オブ・テン」という映像作品。20世紀のアメリカで、規格品の部材によってつくられた実験住宅や軽量で量産可能なシェルチェアで有名なイームズ(Charles & Ray Eames)によるものです。「パワーズ・オブ・テン」では、まず湖畔の公園に寝そべる1人の男の映像からはじまります。そこから10の〇乗単位で映像が引いていき、最後は宇宙の果てまで!!すると今度は一気に地球へ、そして最初の男へと10のマイナス〇乗単位でマイクロな世界へと入っていきます。最後の最後にたどり着くのは、男の細胞の因子や陽子の世界!!この作品がつくられたのは、1968年。CGも何もない時代に、こんな映像をどうやって撮ったのか。そんな視点で見てみても面白いかも。

設



DVD「EAMES FILMS:チャールズ&レイ・イームズの映像世界」(バイオニアLDC)。他の映像作品やイームズ自邸の5年間の記録映像なども収録されています

Special Feature

1/1
の
実
楽
世
界
!

3

リニューアルした東京都美術館に建ち上がった 1/1の「生きるための家」

Text = Motoko Tanaka(mosaki)
Photo=Masaki Onishi(mosaki)



リニューアルオープンした東京都美術館で9月30日(日)まで「Art&Life: 生きられる家」展が開催されていた。内容は、2011年4月の段階で教育機関に在籍中もしくは卒業(修了)後5年以内を応募条件とし、「生きるための家」というテーマで近未来の「すまい」の在り方を提案するコンペ案が展示されているというもの。審査委員は、小嶋一浩・西沢立衛・平田晃久・藤本壮介・真室佳武。1等にはなれなかったものの日本大学の卒業生たちの、いくつかの作品が入賞を果たしている。

この展覧会では、美術館内の吹抜けに見たこともないような大胆な原寸大模型が登場した。設計者は現在東京藝術大学大学院生の山田紗子さんだ。タイトルは「家族の生きるための家-大柱と屋根のつくる、住むための濃度」。集まった157案の中から最優秀作品に選ばれた。

巨大な四角い柱が何本も、地面に向かって斜めに突き刺さっている。それらを貫通するようにして、床が3枚浮いている。床も斜めになっており、全体を通してほとんど平行がないような形だ。これが原寸大で迫ってくるとなると、圧倒される。施工期間は1週間。計画では木造だが、防災上の問題などからここでは鉄骨造でつくられている。また壁はガラスが入る計画だったが、これも安全とコスト面から実施されなかった。

この原寸大模型の内部に入ることではできないが、小さな家具まで細かく配置され、実際の居住空間として綿密に計算されていることがうかがえる。模型の中に視線を潜り込ませると、包まれるような感覚のある狭い部分から、開放感のある広がりまで、壁のないシームレスな空間に、さまざまな場面が展開されていくことがわかる。床が斜めになっていることから、上階、下階の関係も曖昧になり、何とも楽しげだ。

開催初日に行われたトークイベントの中で、山田さんは大黒柱の存在感について言及していた。家の中で、構造体でありながら家族の拠り所として機能していた大黒柱を何本も配置することによって、さまざまな居場所や居心地が現れるのではないか、という思考が、この作品の中で試されている。

図



1. 最優秀賞となり美術館内の吹き抜け空間に1/1で展示された山田紗子さんの「家族の生きるための家-大柱と屋根のつくる、住むための濃度」
 2. 最優秀賞を含め、全39作品の模型とパネルが展示された
 3. 「1人のための家とみんなのための家」 桔川卓也・金子太亮 (日本大学海洋建築工学科2007年度卒/坪山研究室)
 4. 「はがされた家」 岩木友佑 (大学院理工学研究科2010年度修了/本杉研究室)・松本晃一 (大学院理工学研究科2010年度修了/山中研究室)

前川國男の建築が、保存・再生されました！



今回取り上げた「東京都美術館」は、上野公園の中に建築家・前川國男が設計した建物。前川といえば、江戸東京たてもの園に移築されている「前川國男自邸」や同じく上野公園内にある「東京文化会館」が有名ですね。この「東京都美術館」の前身は「東京府美術館」(1926年開館)で、その「東京府美術館」が老朽化にともない建て替えが決定したのが1971年でした。当時、ル・コルビュジエに学んだ後、日本を代表するモダニズム建築家となっていた前川は、その設計を任されることになります。そして、「平凡な素材によって、非凡な結果を創出する」ことを目指し、「東京都美術館」は1975年に完成。上野公園に溶け込みながらも機能的につくられた美術館は、やがて公募展をはじめ多くの展覧会が開催され、日本でも重要な美術館へと成長していくことになります。そして、それから約35年の年月が経ち、老朽化やバリアフリーへの対応が必要となり、今回の大規模改修となったのです。今回の改修で最も配慮されたのは、「前川建築」を保存するという点。できるだけ躯体は活かし、建て直すものについても新築時のものを再現したタイルを使うなど、さまざまなアイデアと技術でつくられました。建物がどのように更新されていくのかという視点からも、見る価値の大きな建物。まだ行ったことがない人は、ぜひ一度訪ねてみてください。

4

インドから海を越えてきたパーツたち
東京国立近代美術館の庭に完成した「夏の家」text=Motoko Tanaka
photo=Masaki Onishi

MOMAT Pavilion designed and built by Studio Mumbai

さまざまな展示企画が随時行われている東京国立近代美術館の前庭に、スタジオムンバイの建築がやってきた。期間限定の仮設建築と聞くと、どこか頼りないものを想像してしまうが、さすが設計から施工までを一括するスタジオムンバイ。がっしりと私たちを受け止め、楽しませてくれる建屋3棟を完成させた。

材料は、そのほとんどがリサイクルのチークだ。インドで原寸をつくり、パーツ化して日本に輸送し、現地で組み立てた。現場ではスタジオムンバイの建築家2人と大工3人が中心

となって、その他スタッフやボランティア総勢15~20人が施工に携わった。その期間はわずかに10日ほど。完成度の高さを鑑みると驚くべきスピードだ。完成までの様子はブログでもリアルタイムで公開され、現在もアーカイブとして閲覧することができる。

近づいてみると、小さな採光や窓枠ひとつにもデザインが施されていることがわかる。さらにパーツの組み立てだけでなく、部分的に土壁で仕上げるなど、素材にまでこだわっている。匂いから手触りまで、五感が心地よく刺激される建築だ。

全体での収容人数は25~30人が想定されているが、イベント開催時などには人々は建屋だけでなく芝生や石の上などにも、それぞれに居場所を見つけてくつろいでいる。この石も輸送されたもの。大きな石を現地で割り、こだわって配置されたという。さらに鳥の止まり木からヒントを得たという竹のオブジェも加わり、ランドスケープにまで細かい気配りがなされているという完成度の高さ。夜間までオープンしているので、昼と夜、季節ごとの移ろいも楽しみだ。

■



P24の「mosakiのイベント巡礼」でも取り上げています。

| 会場：東京国立近代美術館
 (〒102-0091 東京都千代田区北の丸公園 3-1)
 | 会期：8月26日(日)-2013年1月14日(月・祝)



駿河台キャンパスから1.6km、徒歩19分

東京国立近代美術館では、美術だけではなく、近年さまざまな建築展が企画・開催されています。場所は皇居のお堀沿い、最寄りの駅は竹橋駅。竹橋駅の地上部分は、日建設計、林昌二の名作「パレスサイドビル」(1966) (右写真)です。そこから橋を渡ると目の前が、「東京国立近代美術館」(1969/ 谷口吉郎) (左写真)。駿河台キャンパスからも意外と近いところにありますよ。一度、授業の合間、地図を片手に友だちと散歩がてら行ってみてください。

1 | 建築学専攻の加藤千晶さんが、 「2012年日本建築学会 優秀卒業論文賞」を受賞！

Text = Motoko Tanaka(mosaki) , Photo=Mika Ojima, Urara Tanaka



3つの図面と1つの建築、 そこに秘められた設計プロセスの謎を紐解く。

重 枝研究室大学院建築学専攻M1の加藤千晶さんが、卒業論文「長谷寺本堂建地割図を用いた本堂計画手法の解明に関する研究 江戸初期再建社寺建築の計画手法に関する一考察」で、2012年日本建築学会優秀卒業論文賞を受賞した。

加藤さんが奈良県桜井市にある長谷寺をはじめて訪れたのは、関西研修旅行のときだった。長谷寺本堂の迫力のある風貌に惹かれ、資料を調べていくうちに、興味深い事実に出会う。

現在の長谷寺本堂は慶安3年(1650)、徳川家光の寄進により再建されたもの。現状と同じ図面は残されていないが、その代わりに、現状を形つくりとする過程で書かれたと思われる計画案の図面が3案、残されていたのだ。加藤さんは、この3案が現状に対してどのような影響を及ぼしているかを辿ることで、当時の建造物におけるデザインのつくられ方

を研究することにした。

研究の過程ではまず、3つの計画案それぞれが、どのようなコンセプトでデザインされたかを知るため、彫刻などの装飾や、細部の分析を行った。すると室町風、再建当時の慶長風、桃山風と3案それぞれの作風の違いが見えてきた。さらに調査を進めると、内部空間の計画においても、どの案も現状とは全く異なる計画となっていたことが判明した。建物の様式や造営方法を理解した上での研究が展開できたこと、さらに図面を用いた研究という新しさへの期待が、今回の受賞に繋がった。

加藤さんは現在、大学院修士前期課程の1年目。現在は徳川家光の寄進による他の建造物についての研究をはじめており、江戸時代の神社仏閣が人々にとってどのような存在であったか調べていきたいという。

長谷

長谷寺本堂についてももう少し詳しく。



上の写真が、長谷寺本堂（奈良県桜井市大字初瀬）。長谷寺は真言宗豊山派の総本山。近畿2府4県と岐阜県に点在する33か所の観音霊場を巡る西国三十三ヶ所観音霊場の第8番目の札所でもあるそう。本堂と同時期に建設された繋廊や鐘楼なども当時のまま残っている。近年、本堂屋根修理に伴って行われた各種調査で、本堂完成時の棟札や慶安元年（1648）の銘がある平瓦、さらに帳簿や図面などの資料が確認、整理され、これらは長谷寺に関わる建築物の建立年代や建設の経緯を示す貴重な資料として府指定による保存が図られている。



左、上：長谷寺本堂の計画案の3つの図面を広げながら、話を聞かせてくれた加藤さん。一つひとつ図面の細部をよみとりながら、実存する建築物と照らし合わせる作業を積み重ねていった。まとめられた論文を読みたい人は、ぜひ研究室を訪ねてみよう

右：駿河台校舎5号館にある歴史研究室の院生室。普段は、この場所で仲間とともに加藤さんは、研究に動いている



★ニュース

2| 被災地石巻市にて開催された「雄勝未来会議」に佐藤光彦スタジオが参加

2012年8月19日に石巻市雄勝地区の復興計画(案)住民説明会及び意見交換会「雄勝未来会議」が行われた。日大からは大学院生9名(朝倉亮・蔵藤勲・佐藤太輝・丹下幸太・芳我まり子・平野悠哉・藤本陽介・矢板悟・矢野卓馬、担当教員:佐藤光彦教授(海外研修旅行で不参加)、山中新太郎助教)が参加し、約400名の住民を前に大学院の授業である建築デザインI「佐藤光彦スタジオ」の成果をベースにした高台移転案を発表(下写真)。住民らから高い評価を受けた。取り組んだ学生たちにとっても大勢の住民の前でプレゼンテーションすることは、貴重な経験になった。今後、計画案は住民や行政、土木コンサルタントらとの協議を重ねながら、実現へ向けて修正を図っていくことになる。



4| 山中研究室所属、研究員の落合正行さんらが「建築仕上技術・デザイン競技2012」で最優秀賞を受賞

落合正行さん(理工学研究所研究員、建築学科山中研究室所属)らが「建築仕上技術・デザイン競技2012」で最優秀賞を受賞。日本建築仕上学会が主催するこの競技は、新しい建築空間を実現する建築仕上材料とその技術提案を募集したもので、農業廃材から出来るOSSB(麦わら成型合板)を使って自立可能な仕上材の提案(右写真)を行ったことが高く評価された。その他の受賞者は、大塚秀三さん(ものづくり大学技能工芸学部建設学科講師)、長島早枝子さん(大学院M2/山中研究室)、矢嶋宏紀さん(大学院M1/山中研究室)、杉本将平さん(研究生/山中研究室)、宮里直也助教、山中新太郎助教。



★受賞

3| 建築学科OB永井佑季さんが「IASS HANGAI PRIZE」を受賞

IASS(国際シェル空間構造学会)2012にて、建築学科OB永井佑季さん(2011年博士後期課程修了/岡田研究室)の「ホルン型張力膜の風応答性状に関する研究」に対して、若手研究者に贈られる「IASS HANGAI PRIZE」が授与された(右写真:左から四人目が永井さん)。この研究は、永井さんの博士論文の一部をまとめたもので、膜構造の耐風設計に対する新しい手法の提案が高く評価された。

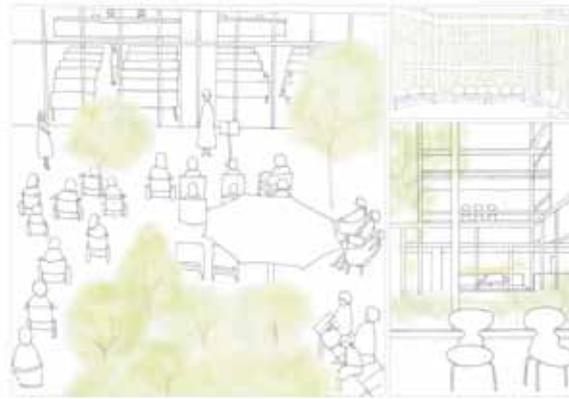
IASS HP: <http://www.iass-structures.org/index.cfm/page/Hist/HPr.htm>



5| 建築学専攻の2チームが「新病院建築 企画提案 コンペティション」に入賞

建築学専攻の朝倉亮さん（大学院 M1/ 山中研究室）・塚越望さん（大学院 M1/ 佐藤光彦研究室）（右上図）と山本匡希さん・斎藤大亮さん・町田昴弘さん（全て大学院 M1/ 今村研究室）（右下図）の2グループが「新病院建築 企画提案 コンペティション」に入賞した。このコンペティションは、近未来の整形外科病院のあり方への提案が求められたもの。2012年6月10日に行われた最終プレゼンテーションを経て、受賞となった。

関連 HP : <http://www.iwai.com/info/2012/competition.html#result>



6| 横内憲久教授らが「日本都市計画学会 年間優秀論文賞」を受賞

横内憲久教授、岡田智秀 社会交通工学科准教授との連名による「海岸空間とその背後空間を一体的に捉えた新たな海岸まちづくりに向けて～米国ハワイ州の“海岸線セットバックルール”に着目して～」が（社）日本都市計画学会年間優秀論文賞を受賞した。本論文は、米国ハワイ州で取り組まれている海岸まちづくりの防災対策手法である 海岸線セットバックルールの内容とその効果について報告したもの。

7| 高田康史短大副手、小石川正男短大教授、保坂裕梨短大助手が「これからの荻窪駅周辺まちづくりを考える アイデアコンペ」で金賞を受賞

高田康史短大副手、小石川正男短大教授、保坂裕梨短大助手連名の「Ogikubo Sharing - 共有する文化が未来を描く -」が、「杉並区区制施行 80 周年記念 これからの荻窪駅周辺まちづくりを考える アイデアコンペ」（主催：東京都杉並区）で金賞を受賞した。応募件数 72 作品の中から、第一次審査にて上位 6 点が選ばれ、第二次審査では 9 月 2 日に杉並公会堂にて公開ヒアリングによる審査・表彰が行われた。「今後の 10 ～ 20 年を見据えて目指すべき荻窪駅周辺のまちづくり」をテーマに提案が求められた。

★論文発表 / 出版

8| 八藤後猛准教授らによる論文が建築学会技術報告集に掲載

八藤後猛准教授と田中賢さん（日本福祉大教授 / 1987 年大学院修了 / 野村歡研究室）との共著による論文「車いす・ベビーカーが動きはじめる床面傾斜に関する実験」が、日本建築学会技術報告集 第 39 号（2012 年 6 月号）に掲載された。

9| 矢代真己短大准教授による翻訳著書『建築家への ABC』が出版

矢代真己短大准教授は、翻訳著書『建築家への ABC（原著者：ダグ・パット）』（下写真）を鹿島出版会から出版した。建築家とは何者か——A から Z までの 26 のチップスで描き出した一冊である。



Laboratory Report

井上研究室が被災地へ
仮設住宅の音環境をリサーチ。よりよい住環境をめざして。



現在、井上研究室では、被災地における仮設住宅の音環境性能の実態調査に取り組んでいる。

その経緯と今後の展望について、井上勝夫教授に研究室にて話をうかがった。

東 日本大震災は、これまでの震災とは異なり、家そのものの多くが流された。まだ部分的にでも残っていれば、その建築物に対してサポートできることも多いが、何も無いところにはどうすることもできないという歯がゆい想いをする研究室も多いだろう。

そんな中、昨年6月あたりから被災地では仮設住宅に住む人々が徐々に増えはじめた。今ではその数は、宮城県、岩手県だけでも約3万5千軒、福島県や他県への疎開も含めると約5万3千軒におよぶという。それから1年以上がたち、井上研究室ではこの状況に何か貢献できないかということになった。

「これまででは、できることがほとんどなかったのですが、仮設住宅に多くの方が住みはじめたことを見て、何かコミットできないかと考えはじめました。仮設とはいえ、ここで余儀なく生活される方々は、半年や1年ではなく、5年、6年と暮らされることは目に見えています。それであれば、これら仮設住宅の住空間性能がどのような状況にあるのかは、調べておくべきだと考えたのです」

プロジェクトはこの夏に始動し、まずは予備調査として、可能な限り一帯を調査。するとそこには約30社によって、1住戸9坪(2DK)をベースとした仮設住宅が、基準がそれほど

ない中でつくられていることがわかった。

現在、3名の研究室所属の大学院生、大学生らが岩手県の宮古市や陸前高田市を中心に木造軸組工法と鉄骨系プレハブ、木質系プレハブの3種類の仮設住宅を訪ね、音や振動の問題について調査を続けている。仮設住宅は平屋で長屋形式。そこでは住戸間の音がどの程度、生活に影響しているのかがポイントとなる。実際に遮音性能などの数値を測定し、一方で居住者の方々にも協力してもらい、ヒアリングをしながら、実性能を導き出している。

「この調査によって、今すぐ何かが改善されるということは難しいでしょう。ただ、将来同様な災害が起きたときに、仮設住宅であっても環境工学の見地から、これくらいの性能は確保すべきだと。そういった性能の提案へとつながればと考えています」

現在、被災地で100戸の居住者反応が上がってきたようだ。これからも、現地調査を続け、300戸の居住者反応をめざすという。これらは学生たちの修士論文、卒業論文としてもまとめられる予定だ。

また、同じ環境工学系の池田研究室でも仮設住宅の空気環境に関する実態研究が行われているという。



「今すぐ改善することは難しくても、将来の災害の役に立てたい。」



- 1.仮設住宅外観。整地された高台に寄り添うように仮設住宅が並んでいる
- 2.3.遮音測定風景
- 4.宮古市西ヶ丘第4仮設団地外観
- 5.荷竹地区高浜仮設団地外観
- 6.新里生涯学習センター外観
- 7.仮設住宅内部
- 8.陸前高田市高田町大隅仮設配置図

毎号、一枚の建築写真！

A Photo of World Architecture

2年に一度開催されるヴェネチア・ビエンナーレ建築展。今年の日本館の展示は、建築家・伊東豊雄さんがコミッショナーを勤め、建築家の乾久美子さん、平田晃久さん、藤本壮介さんと、写真家・畠山直哉さんによりつくられました。テーマは、みんなの家「ここに、建築は、可能か」。復興支援のために岩手県陸前高田市に建設中の集会所を中心に、建築家は震災後、何ができるのかを模索し続けてきたプロジェクトを空間全体を使って展示したそう。そして、なんと国別参加部門で最高賞となる金獅子賞を受賞！国際的にどのような評価を受けたのかを知るためにも、帰国後開催される、報告会的なイベントに参加してみるのもいいかも。

vol.02

13th International Architecture Exhibition,
Venice Biennale 2012
The Japan Pavilion

Contents

02 [SPECIAL FEATURE]

1/1実寸の楽しい世界

1. 海の家プロジェクト | 建てることの難しさ楽しさを体験した2012年の夏
2. デザインワークショップ | 21世紀の千利休を目指し、学内につくり上げた4つの茶室
3. リニューアルした東京都美術館に建ち上がった1/1の「生きるための家」
4. インドから海をこえてきたパーツたち | 東京国立近代美術館の庭に完成した「夏の家」

16 [NEWS & TOPICS]

建築学専攻の加藤千晶さんが、「2012年日本建築学会 優秀卒業論文賞」を受賞
他

20 [LABORATORY REPORT]

井上研究室が被災地へ
仮設住居の音環境をリサーチ。よりよい住環境をめざして。

22 [A PHOTO OF WORLD ARCHITECTURE]

vol.02 13th International Architecture Exhibition,
Venice Biennale 2012 The Japan Pavilion

24 [EVENT REVIEW]

mosakiのイベント巡礼vol.2
「夏の家 MOMAT Pavilion designed and built by Studio Mumbai」

SHUNKEN

2012 Oct. Vol.40 No.3

「駿建」

発行日：2012年10月22日

発行人：岡田章

編集委員：佐藤慎也・橋本修・川島和彦・田嶋和樹・山崎誠子・田所辰之助・高田康史

編集・アートディレクション：大西正紀 + 田中元子 / mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：<http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

event review

mosakiのイベント巡礼

夏の家

MOMAT Pavilion designed and built by Studio Mumbai

2012年8月26日(日) - 2013年1月14日(月・祝)

インド×日本、人々を迎える 美術館の新しい玄関現る！



前庭につくられた3つの小屋。左の小屋は縁側のようなプランコを持つ。奥は2階建ての小屋。階段を上ると眺望が敷地外のパレスサイドビルまで抜ける。右手前的小屋は縁側のような細長いベンチを内包する。複数の写真も合わせて、特集中のP14,15にも、この展示について取り上げています。

◆おお、ほんとに建ってる！期間限定の原寸って聞くと、どこか貧弱な仮設のイメージがあったけれど、しっかり建ってる！

♥早速中に入ってみよう！まずはプランコがついてるほうから！ああ、身体を揺らすだけでリゾート気分。楽しい～！

◆奥の壁は外側に傾いていて、ここは開放感のある建屋だね。よし、次いってみようか。

♥じゃ今度は階段のあるほうに昇ってみる。おお、やっぱり高いところっていい！

◆高さのバランスも絶妙で、互いの建屋が邪魔し合わないね。ここは内部が土壁になっている。狭い空間だけど、眺望もいいし小窓が開いていたりして、気が利いてるよね。ギャラリールームの展示会で公開されていたように、スタジオムンバイでも土壁ができるんだけど、ここは日本の風土に合わせるため、日本の左官屋さんが施工したらしいよ。

♥もうひとつの建屋はシンプルな長方形で、日本の縁側みたいだね。でも窓枠とか、細かいところがちゃんとデザインされている。あなどれないなあ。

◆材料のほとんどがリサイクルのチークなんだって。インドで原寸をつくって、日本に輸送して組み立てている。スタジオムンバイの建築家2人と大工3人が中心となって、ボランティアやスタッフ総勢 15～20 人が施工。わずか一週間程度で完成させたんだって。その様子は随時ブログで公開されていたね。

♥ところどころに配置されている石も持ってきたんだってね。大きな石をここで割って、こだわって配置していったらしいよ。

◆不思議な竹の造形物は、もともと鳥が止まるようにつくられたものからヒントを得ているらしい。風にほんのり揺れて、かわいらしい。

♥とにかく、この小さな建物たちは、この場に

とても似合ってる。そこがすごいし、そこがスタジオムンバイらしいって感じたよ。

◆環境もすべて巻き込んで、そこでできる洗練されたリラックスを提供する。本当に無理なく、その場でいきいきと生やすように、建てるんだね。

♥「夏の家」っていうけど、会期は来年の1月まであるんだね？ずっと「夏の家」のまま続けるのかなあ？

◆秋冬へ向けてマイナーチェンジをする計画もあるらしいよ。そっかも楽しみだね。

♥会期終了したらどうなるのかな？

◆まだ未定だって。スタジオムンバイとしては、このまま日本のどこかで使い続けてほしいと思っているみたい。

♥そうであってほしいね。またどこか、似合う場所だね。

Recommend | 2012年10-12月

【1】「建築文化週間 2012 建築夜楽校 21世紀の首都」| 建築会館 (港区芝 5-26-20) | 2012年9月25日(火)～10月29日(月)

磯崎新、八束はじめ、重松象平らによるシンポジウムや街歩き、本号でも紹介した銀茶会の公開審査、先のヴェネチア・ビエンナーレで金獅子賞を受賞した伊東豊雄らによる特別企画「東日本大震災後の建築 ヴェネチア・ヴィエンナーレ報告」も予定されている。

【2】「ビャルケ・インゲルス イェス・イズ・モア アーキコミック・オン・アーキテクチュラル・エヴォリューション」| GA ギャラリー (渋谷区千駄ヶ谷 3-12-14) | 2012年9月22日(土)～11月4日(日)

30代にしてデンマークとニューヨークを拠点に世界中で活躍する、ビャルケ・インゲルス率いるBIG (Bjarke Ingels Group) の展示会。BIGの作品をコミックブック(マンガ)のフォーマットで、社会的、政治的状況とともにプロジェクトの成り立ちを紹介した画期的な著作『Yes Is More』が日本語に翻訳され、そのハイライトが展示される。なんでこんな建築が建ち上がるの？建築にこんなプレゼンが可能なの？!

【3】「篠山紀信展 写真力 THE PEOPLE by KISHIN」| 東京オペラシティアートギャラリー (新宿区西新宿 3-20-2) | 2012年10月3日(水)～12月24日(月・祝)

1950年代後半から第一線を走りつづけてきた写真家、篠山紀信(1940-)の展示会。時代に先駆けつねに話題をさらってきたこれまでの作品が一堂に会す。美術館で写真を展示する可能性はどこにある？「写真力」って何なの？建築以外の展示会にも足を運んでみよう。

【編集後記】

「駿建」がリニューアルしてから2号目。今回ははじめて特集という形で編集してみました。いかがでしたでしょうか？ひとつでもあなたの興味に引かれるものがあったら編集冥利につきます。テーマの「1/1」というキーワードは何も意匠やデザインに限られた話ではなく、歴史や材料、環境にいたる建築のすべての分野、そして他分野に関わってくるもの。だから、この特集をきっかけに、スケールというものをより意識してみてください。いろんなスケールでモノを見る楽しさを身につけると、一気に世界が広がること間違いなし！(イームスの映像作品を紹介しましたが、これも本当にオススメ。一度見てみてくださいね。)それでは、次号もお楽しみに！ところで、このmosakiって何者なんだ？と思っている方も多いはず。次号で少し自己紹介させていただきますね。(大西正紀 + 田中元子/mosaki)